

令和元年度 第4回四万十町文化的施設検討委員会 議事録

日 時 令和元年8月12日（月） 9：30～11：30

会 場 四万十町役場 東庁舎2階 町民活動支援室

出席委員 内田純一、谷口和史、林 一将、高垣恵一、池田十三生、川添節子、田邊法人、
青木香奈子、酒井紀子、刈谷明子、友永純子

欠席委員 山本哲資、下元洋子、林 伸一、中平浩太

事務局 川上哲男教育長、熊谷敏郎教育次長

生涯学習課（林瑞穂課長、味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任）

図書館・美術館（長木千葉美、谷脇八代美、武内真紀、山地有美、山地順子、山口香）

（事務局）

皆さん、おはようございます。令和元年度第4回文化的施設検討委員会を始めます。

それでは委員長、よろしく申し上げます。

（内田委員長）

おはようございます。忙しいところご参集いただきましてありがとうございます。

本日は午後に猪谷千香さんの講演もごございます。それも踏まえて、よろしく申し上げます。

今回の予定を説明してから協議に入りたいと思います。

お手元に「第15回米こめフェスタ出展要領」という資料があると思います。この委員会の中で、町民の方々と一緒に文化的施設を作っていく気運を盛り上げ、どのような思いを持ってらっしゃるか、色々な機会を利用してやっていこうとなっていました。その取り組みの一つに米こめフェスタへ参加してブースを設けようという話が出ました。それに関して、後半の30分間ほどご議論いただきたいと思います。

ですので11時までは、基本計画の協議の続きになります。

お手元の配布資料（の基本計画案）は、事前に岡本さんにお送りして追記してもらったものです。おおよそ第1章は骨格が決まってきました。ですのでその協議のあとに、第3章についてもご意見を頂いて、11時まで進めたいと考えております。

（ARG 岡本）

前回の配布資料と違うのは、第3章に大幅に加筆したことです。

今日ご議論いただければと思いますが、第1章は前回までの皆さんのご議論を踏まえて、ほぼこんな文章でいいんじゃないかという形にしてあります。追記した部分の表現や抜け・漏れがないかをご確認

ください。

第2章については11月に作業をと思っております。

今日よりご議論いただきたいのは第3章です。具体的なサービス目標や施設の管理運営に関して文言を入れてあります。ご注意くださいたいのは、追記してある文はあくまで叩き台になるようにザックリ書いてあるだけです。これがいいという話でもなく、一応今までの議事録等をふり返りながら、散発的に出てきたご意見を抜け漏れなく記載したつもりではあります。

あとはそれ以外に決めておいたほうがよいことです。例えば「想定する立地」「想定する諸室仕様」という項目があります。そろそろ、どれくらいの規模で、例えば図書館の閲覧室や美術館の収蔵庫の広さなど、議論を進めたいです。

この基本計画が確定したら、今年度中に、四万十町の新しい文化的施設を作るにふさわしい設計業者の選定を行う段階に進みます。設計者の選定を行う上で、確実に決まっていなくて設計側が提案できないのが場所と規模です。全体の規模さえ決まっていればあとは設計段階でどうとでもなりますが、とはいえ全体が何㎡なのか決まっていなくて設計の提案もできません。それとこれは町の皆様に大きく関わりますが、工事費の算出ができないんですね。それらが分かっていると設計者もどれくらいの仕事感なのか分からなくて手の挙げようがないです。ですので、全体的な規模感をそろそろ決めたいと思っています。

くり返しますが初出の仕様は設計に入る前ですので、設計に入ってから変えることができます。ここで決めたから絶対にそうしなくちゃいけないということはありません。むしろ優秀な設計者を選定して、町の案はこうだが、プロの目からはこうしたほうがもっと使いやすいですよ、そういうご提案を頂きながらデザインを考えればいいので、確定しなければいけないわけでは決してありません。そこはご自由にご議論いただければと思います。

資料そのものの位置づけの説明は以上です。

(内田委員長)

ありがとうございました。

岡本さんの言うように確定するわけではないので、これまで通り自由にご発言いただければと思います。

こういうものを案外ちゃちゃっと作ってしまうと、ある声だけで決まってしまうことがあって後々困るということがあるわけです。非常に細かいところに入ってしまって、にっちもさっちも行かなくなるのはこういう会をしているとまああることで、その辺りを岡本さんはよく分かってらっしゃいますね。そういう意味では「ざっくり」と言われますが、大事な点を踏まえつつ自由に話しながら、そして専門的なところはこちらで上手く専門家を活かすという流れが、今の四万十町には出来てきてまして、文化的施設の作り方に入ることがございますので、そういうところを大事に進められるよう、今日もよろしくお願いします。

それでは最初に基本計画案に入りたいと思います。

岡本さんに軽く説明いただきたいと思います。

(ARG 岡本)

まずは第2章の前文をつけました。

これは特に子どもたちの在り方を踏まえて、現代社会のデジタル情報技術は無視できないので、きちんとこれと向き合うことをかなり明確に示すものになります。

この種の計画書を我々も作りますし他の自治体で作られているのを読み込むこともあります。こういった姿勢を最初からきちんと示すケースはほとんどないので、ここは四万十町らしさが出てよいと私は思います。

特に地方都市は「豊かな自然環境」や「豊かな交流・人間関係」と曖昧な記述に終始しやすいんですが、私は今まで議論に出てますようにこういう町こそ積極的に新しい技術を取り入れていく、その点において、大都市や大都会に全く劣るものではないと示していくことが町の子どもの未来に繋がると思いますので、この書き方がよいと思っています。

それ以降は追記で、具体的なことは次のページから記述してあります。前回行いました町民フォーラムの意見も踏まえています。

フォーラムで申し上げましたが、どうしても「あれか、これか」と選択しなきゃいけないという発想になりがちです。ですが私はこういう施設を作る時に、選択をしなきゃいけないというのは乱暴だと思います。それを言ったら「図書館か、美術館か」の議論になってしまいますし。でもどちらも等しく必要なものです。そこにおいて何か選択を迫るようにしてしまうと、より貧しくなってしまいますし、選択肢がないというのは若者にとって最も窮屈に感じることでありますから、「あれもこれも」を貪欲に確実に手に入れるという方針で記述しています。

1については美術館に踏み込んだ記述にしています。従来の展示・観賞だけでなく、作品を前に対話しながら鑑賞できる形にしていく。あと以前のワークショップでの四万十高校の女子高生のお話を何度も話しましたが、制作もできることを明確に反映しています。

子どもたちが自分の居場所を見つけられる点に関しては、前回までに「子どもたちだけって見方は違う」、「大人と、様々な人と接点を持てるようにするのが大事」という意見がありましたので、「多様な社会と接点を持てる場所」と追記しました。

3に関しては前文を受けた形ですが、デジタル情報技術にきちんと向き合っこの先の人生を豊かに生きていくためのリテラシーやスキルを育むことを追記しました。

4の最後ですが、先ほどの「あれか、これか」議論をするのではなく、貪欲に「あれもこれも」を追及しようという姿勢を示しております。

他は比較的、追記事項はなく、前回で記述しきれなかった部分を大幅に書き込みました。

特に「イ、広域なまち全体にひらかれた地域を繋ぐ」に関しては議論が十分必要な点だと思っています。

冒頭はそう違和感ないと思っています。窪川・大正・十和全体を繋ぐものでなくてはいけないことを記しています。さらにその具体像として、窪川に新施設を建てる話ですが、まず大正分館との連携をきちんとしよう、としています。

そして、大きな話ですが、今後、十和に分館ないし分室を開設する。今まで全体的には合意が得られていると思いますが、このまま窪川だけに施設整備がされるのはあまりに十和地域が置き去りになってしまうので、この計画書の中で、十和にきちんと施設を作ると明記しました。この辺は皆様の合意が非常に

重要ですので、できればこの点だけは今日決着をつけたいと思っています。

先般は私も、十和に行って地域の人たちと対話する機会を酒井さんと刈谷さんに作っていただきました。やはり地域の皆様が（図書館を）求める声、たくさんありますので、この計画書が今後議会などで示される可能性を考えると、早い段階で十和に対して責任を持つという意味を示したほうがよいと思っています。

他に追記した部分を言いますと、四万十町市街地再生基本構想等も確定しておりますので、窪川の観点で見た時に、単に施設を建てて終わりにするのではなく、地域全体の発展に繋げる仕掛けを作っていきますと書いています。

ウに関しては、サポーター・地域の人たちとの協働をもう少し追加しました。

エの情報システムに関しては、冒頭の **society5.0** も踏まえて積極的に新しい仕組みを入れましょうと書いています。ここはどれくらい具体化するかがありますが、最低限は、スマートフォンのような携帯型・装着型の端末を使って、都会にはない利便性を発揮しようというのが良いと思っています。あとこれは後ほどデモができればと思いますが、先般オーテピアが新しいアプリを出しました。自分が探している本がオーテピアのどこに置かれているのかスマホで分かるという、現時点では日本の公共図書館で最新と言っている仕組みが導入されています。ただ厳しいことを言うと、「しょせんこの程度か」という感じで、本気でやれば四万十町はその先に行くことができるはずです。

また、オーテピアは高知高専と共同開発したということで、取り組み自体が素晴らしいと感じました。つまり県だけで頑張っちゃうんじゃなくて、地域の財産である高専生と一緒に学びながらそういう仕組みを作り上げたことのほうが重要な意味を持つてゐるんですが、四万十町のこういうシステム作りに関しても、同じことができればと考えています。3章にも記述があります。

最後には、デジタル技術は大事だけど、そういったインターネットや情報技術との適度な距離感を考えようということを入れてあります。それこそ昨日、酒井さん、刈谷さん、下元さんのご厚意でお話いただく猪谷千香さんのお嬢さんと川遊びに行きました。大正のかっぱ館辺りで、ソフトバンク入らないんですね。何が良かったかって、スマホを気にせず1時間ほど遊び呆けるといのは本当に豊かな時間で、今朝の朝食の席でも「本当に楽しかった」と言っていて。人生で初めて川遊びをしたらしいですが、たぶん一生の思い出になったと思います。こういった程よい距離感を、TPOを身につけながら、気づいたらいつもスマホ触ってるんじゃない、豊かな人間性を育むことを一文に入れてあります。

1章に関してはおおむね以上です。

あと一つ追加するとこの図ですが、一枚でピロッと分かり、施設に入らせる気にさせるもの、かつ四万十町らしい海・山・川を立体的にイメージできて、さりとして四万十川の雰囲気を感じるという図を作りたいと思っています。私は絵心がないので、下元委員にお願いしております。下元さんは大変クリエイティブな方なので、たぶん12月までに下元さんが、皆さんの納得いく図にさせていただけると思っています。この図に関しては皆さんと議論しながら、最終的に計画の概要版を示す時、あるいは開館して館内に飾る時、「この施設はこういうものですよ」と一枚の絵にまとめたいと思います。これについては現在作成中ということでご理解いただければと思います。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございました。

ひとまず第1章から進めていきますが、十和の話に入る前まででいかがでしょうか？ 第3章の1の「はじめに」ですね。まさにこういう地域から最先端、人間中心社会が決して絵空事ではない、半歩先の未来を見据えるという基本姿勢を出した。

その次に「あれもこれも」という思い切ってやってみるとありますね。最初から「あれか、これか」ではなくて、それこそ何でもできるぞと、思い切って出していってますね。そしてその状況に応じて新たなサービスをどんどん展開していくイメージですね。これはない、できないとは決して言わないと。

それから美術館、あるいは創造活動・自己表現の場ですね。この辺りにもう少し意見、どうでしょうか？

(刈谷委員)

「2 子どもたちが自分の居場所を見つけられる場」で、「自分の時間と空間を持てる場所」「多様な社会と接点を持てる場所」と記されていますが、後者はデジタル情報社会への言及と結びつくことだと思います。それは今とても大事です。前者は現代社会だと本当に見つけるのが難しいです。それこそ昨日の川遊びですが、何もしないという場を確保することは難しい。今の社会になったからこそ、あえて大人が意識してそれを子供に、学校教育の場でも社会教育の場でも、構えてあげる。難しいけどすごく大事だと思います。こんな場を持てるようになる根拠を文中に入れてもらいたいです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

この施設が何でもやってしまうのではなく、これをきっかけにどんどん自分の場所や時間・空間が広がっていくというイメージですよ。

(ARG 岡本)

そういう意味で言うと、第3章で「文化施設としてのサービス目標」で記述できればと思っています。

行政のこういう計画だとどうしても目標設定が曖昧であるのがありがちです。やはり厳しい財政状況の中での思い切った投資ですので、きちんとした目標設定を計画策定段階から立てておくべきです。

今は議論のための材料を（資料に）いくつか入れてますが、例えばこういう所に、継続的な調査で地域の子どもたちが、居場所がないとか。私には衝撃的でしたが、「大正ストアの前」という答えが二度と返らないようにする、みたいなものを持つのがいいです。子どもたちが普段どこに行ってるか聞いたら、窪川であれば文化的施設、十和であればご議論いただく分館・分室と、そこが行き場だと返ってくるようにする。そういう子どもたちが過半数、最終的には100%そう答えてもらえるようにすると、明確な目標として持つと、ある種の縛り、やらなくてはいけないことになると思います。

こういうの、作る時は皆さん熱意がありますが、作ったあとはどうしても緩んでいくので、常に立ち返って、何のためにこの経済的投資をしたのかを点検する時に、計画に書いてあることを実現できてないとおかしいよね、という。これはもちろん町役場だけじゃないです。町民も含めて今一度、大人が原点に立ち返って頑張ろうと思える縛りをこういったとこに入れておくといいと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

他に、刈谷さんがおっしゃったあとの文で加筆いただいた部分など、いかがでしょうか？

(酒井委員)

丁寧な資料、ありがとうございました。

以前の基本計画に入れてなかったことを書いていただけまして、(学校の)先生たちにも含めて伺いたいんですが、教育再生会議の中で「STEM」「STEAM」を国の方針として掲げて推し進める形になってるみたいですが、この中には身体性やスポーツが明確には入ってなくて、動的な文言が入ってないので、町としてはソフトを相当推してますが、ソフトは若者や子どもたちに特化してるものがあるって、お年寄り、五感を総動員するなら大人ももちろんいるので、身体性のことを明記しなくていいのかなってふと思いました。

あとこのデジタル化の波を捉えて乗っていく時に、英語が重要じゃないかと感じて、子どもたちに英語を早期に導入・教育するようにしてますが、それを大人のほうも学ぶ必要があったり、多様性の面でも、海外の方を招き入れる時も、大人が対応できないのであれば、ちょっと心許ないところもあるので、そういったところ、プラス、あるサイトで見ましたが、STEMとかSTEAMとかそういうのを肩代わりしてるとこの学校と連携してということなんでしょうけど、図書館もそこに物凄く重要な位置を占めてると読みまして、その辺は、この計画書の中に入れることはないのかお伺いしたいと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

大きくは二つに分けて、一つは身体性や五感ですね。体験って言葉をあえて使ってますが、もう少し「体を使って」「頭を使って」とか、身体をどこかに入れるのが一つ目のご意見ですね。創造体験の中に身体性が加わったほうが広がりがあると。

もう一つは、これからのデジタル社会で、学校との連携を踏まえた取り組みができないか。

(酒井委員)

内子町に視察に行った時に、司書や学校司書が揃ってるって前提もありましたが、元々学校との連携がとても整ってたからということがたくさんあったので。その辺も。

(内田委員長)

教育上のことをもっとここに書き込めるんじゃないかと。教育振興計画が改訂されていて、それとの連携も含めていこうという方向ありますよね。

二つのご意見に関していかがでしょうか？

(田邊委員)

酒井さんの話にSTEAM教育が出ましたが、この前、うちの窪川高校と四万十高校の魅力化で、副町長と副校長と、県立高校の四万十町におけるこれからの方向性の話で、まさに内容がSTEAM教育で、デジタル教育を推進しよう。これは県にも予算要求して。通るかは分かりませんが。とにかく窪川と四万十はこういう方向で魅力化を図るという方向性で一つになってますので、そこが明記されていれば、

両校とも助かると思いますので、よろしく申し上げます。

(ARG 岡本)

これは今までをよく考えると、四万十町の議論に国がようやく追いついたという強気なことが言えなくもないんですけど。

田邊校長のおっしゃる STEM あるいは STEAM 教育は、「science(科学)・technology(技術)・engineering(ものづくり)・Mathematics (数学)」、プラスの A は「art」です。今や国単位の教育基本方針になりつつあります。先日、教育再生実行会議の第 11 提言でついに STEAM 教育が明確な教育方針として示されました。この委員会自体はずいぶん前からやっているのだから出たろうとは思っていません。実は私も 2 月に呼ばれて意見陳述人をしました。そういう意味では結構反映されてます。

せつかくこういう方針も強く出たので、図書館教育としても学校教育と並行しながら STEAM 教育を意識することは非常に良いと思います。特に今回は図書館と美術館なので、教育に「art」要素を取り入れられるのは魅力だと思います。

アートというのは、絵を描くだけじゃなくテクノロジーを使う、いわゆるメディアアートもあります。高知の「チームラボ」がありますが、あれはまさにテクノロジーそのものです。

ですのでそういった多様な取り組みが新しい文化的施設では十分に可能ですので、STEAM 教育を入れてるのは良いですし、田邊校長の言われた「高校の魅力化」とセットにもなります。

都会に住んでる私が時として疑問に思うのが、島留学や内地留学の捉え方が「豊かな自然環境」というアピールのみで本当に人が来続けるのか？ です。豊かな自然環境プラス最先端、これこそ本当の最強であるはずですよ。これは東京がどんなに足掻いても絶対に手に入れることができません。

昨日、猪谷さんとお話しして感じたことですが、(猪谷さんのお子さんに) 小 2 になるまで川遊びさせたことがないのにも驚きましたが、考えてみれば東京の川なんて危なくて怖すぎて子どもを入れられませんよ。

猪谷さんは非常に感心してました。酒井さんの長男が(お子さんの) 1 歳上でして。彼がバリバリと川を制覇してるので、より自然で逞しい力があるなと感じました。私も、酒井さんの長男が猪谷さんのお嬢さんを上流に連れて行った時に「お母さん、大丈夫ー!？」って言ってて。小 3 にして母の心配ができる、何て逞しい男子だと非常に感心しました。あれこそまさに、こういう町で育てられる子どもの良さだと思うんですよ。同時に、そこに「最先端」を付け加えればそれこそ最強です。

そういう意味で、STEAM 教育を強く謳いながら、高校魅力化とセットにする。つまり小中学校でそれを積極的に取り入れるし、県と町という関係性はあれど、二つの県立高校は四万十町の財産なので、そことさらに連携を強める。例えば高校に留学してくる子たちにとっても、学校も頑張るし、放課後の地域社会も常に最先端を提供するとなれば非常に魅力的だと思います。

私も島留学など関わってますが、見てて思うのは、1 年くらいの体験ツアー化していて、「よい思い出づくり」でしかないのが大きな課題なんですよ。地域人材に育っているわけでは正直全然ないので。できれば、ずっと住み着いてくれとは言えませんが、高校・大学と進学して、何年かしたら島に戻ってきてくれるくらいでないと意味がない。そこでこの辺の要素を散りばめるのが良いと思います。

一応、STEAM 教育についてはこれから事例作りを云々という形になってますが、私を知る限り、この手の STEAM を書いている文化的施設はまだないので、書けば一番が獲れます。一番、つまり「日本初」

は話題になるので、話題作りというか、四万十町ここにありと旗を立てる意味でもこういう書き込みをするのは悪くないです。委員会にも学校の先生方が入ってくださってるので、社会教育・生涯学習サイドだけで打ち上げた形にはならず、学校とも役割分担して緊密にして抜け漏れがない、実行性がある形になると思います。

(内田委員長)

ありがとうございました。

酒井さんの意見から、STEAM 教育といった文言をしっかりと(計画に)入れる。そこから高校の魅力化、あるいは生まれてから高校までここにあるんだという PR。それらを全体的に踏まえた趣旨にしていくんですね。

それでは、それ以降はいかがでしょう？

「ミッション」はどうします？ ちょっと長く続いてだらだら感が出そうですが。内容的にはこれで構わないのですが。

(ARG 岡本)

この手の書類は長すぎると読んでもらえない問題があるので、さっと読んでいただける形にしたいです。小学校 5~6 年生くらいでも読むのにチャレンジできるくらいが理想ですね。

(内田委員長)

では、より具体的なアクションプランで、とりわけ「ア 図書館・美術館・コミュニティの場を確保する」、この三つの機能の融合。

「エ」は先ほどの話に当たります。情報と実空間の両方を押さえた逞しい子どもたちを育む。

この辺以降ですね。

(刈谷委員)

すいません。ちょっとさっきの話に戻ります。

さっきの話聞いてて、数学や理科の理系技術やテクノロジー、今の時代の流れがどういうふうになっているか理解できました。それがこれまでの文化的施設にはない役割がどんどん付け加えられていくという認識でいます。

個人的に、文系の分野、読書や言語といった従来の図書館の在り方ですごく大事にされてきたものを、そのまま継続するのでは、これからその分野が廃れていくと思います。その「本を読む」というシンプルなところを、今の時代に合った新しい形か、あるいは見直しか、とにかくそこを強化するものを、理系技術と同じくらい大事にしてもらいたいととても感じました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

そうですね。「あれか、それか」ではなく両方大事ですもんね。

これまでの書き方で今まで大事にしてきたものを蔑ろにした計画にはしたくないと。ここは皆さん、

一致してると思いますので。

書き方は考えるにしても、特に歴史や思想は四万十町の得意とするところでもありますよね。それらを繋いで人間を育てていくスタンス。

(刈谷委員)

「文学」を入れてほしいなって。

(ARG 岡本)

具体的な一つの方策として注目してるのは、佐賀県鳥栖市が「教科日本語」という取り組みです。「国語」ではないんです。日本語、言語をきちんと学ぶことにすごく力を入れてますが、単なる言語じゃないんですよ。伝統文化や礼儀作法もです。

鳥栖市の教育委員会に話を聞いたことがあります、「道徳」にはしないんです。まず「道徳」だと一気に子どもの関心は落ちる。子どもからすれば偉そうに教えるを垂れることほど嫌なことはなくて、そういうことではないんです。言葉遊びも含めて豊かな言語感覚や、どういう話し方をするかで立ち居振る舞いをするかに繋がるわけです。乱暴な言葉を使わないとか、人を傷つける言葉遣いをしないとか、道徳として教えるあまり意味がないんですと。そうではなくて、人と人とのコミュニケーションであることを全体的に捉えて子どもたちに教えると、そこがよく成長するというお話をされてました。

まだ広まってませんが、佐賀県はこういうの結構強いんですよ。

あともう一つ、多久市。「孔子の里」として知られています。儒教ではありませんが、『論語』を学ぶなど、かなり熱心に行われています。多久市の子は大概、論語の一節をそらんじることができるという結構すごい子たちです。『論語』と聞くと儒教の教典のように聞こえますが、会社の社長なんか『論語』くらい普通に読んでます。

実は今度新しいお札になる渋沢栄一が『論語』を大変重視していて、バリバリ経済的なことを書いているんです。渋沢栄一は「右手に算盤、左手に論語」の精神を説いています。これは孔子の教えそのもので、ビジネスや商売も大事だけど、一方で人としての道徳観・倫理観も大事である、その両方を追及して初めて一人前の人間になれると。多久市ではそこを意識した教育を行っています。

刈谷さんが言われたことはすごく重要です。従来の、伝統的な価値観も尊重しつつ、さらに新しくしていく。

地域に関する学びをきちんとすることは、私はとても尊いことだと思います。前に味元副課長に教えていただきましたが、維新の志士といわれる方はこの町からも出てますし。大事なのは坂本龍馬のように華々しく活躍して斬られちゃうことじゃなくて、生き残ってこの町の発展を150年前に作った方々がいらっしゃるわけで、その方々についてきちんと学ぶ要素を施設の中に取り入れることは欠かせません。

美術館にしても、作品の企画や展示の中で、以前やった四万十の志士展みたいなものをやるとか。

そこは両方だと思います。まさにそれをやる時に、STEAMを活用する。チームラボ展とかわざわざ高いお金払って東京から持ってこなくても、四万十町にある技術や、四万十町にいる人たちが活躍することで、他に負けないものを作る。

そのバランスを図で示したほうがいいかもしれませんね。新しく取り入れる要素と、従来的にこの町で大事にしてきた要素。それは海・山・川といった自然もありますし、林伸一委員がされてる大正林業

の取り組み、歴史や文化、そういったものを、二つの柱で掛け算になって新しいものが生まれる、みたいなビジュアルを示すとより分かりやすいかと。

(酒井委員)

文化的施設が基本として持っていたほうがいいものが柱として描かれてて、それは実践的な学びと、横断的な学びと、多様性のある学びでした。それらを越境、縦断、連携してすることがすごく重要です。今やってる算数が社会でどう役立つのかがイメージできる取り組みが教科の中に、これを習ってて何になるんだってことの答えがこの中にあるといいと思います。

それと一緒に、試行錯誤してもいいんだよということがあるといい。こういう会議でもそうですが、同調圧力が日本では高いから、発言しないじゃないですか。完璧を求められてる気がして、完璧な質問じゃ答えを言わないといけなさ過ぎるので、試行錯誤してもいい的なことが表に出てもいいと思います。最近はその力が流行ってるくらいに言われてます。確かに問いまくるということが足りないって。分からなかったら問えばいいのに問わないのはもったいないし、学びの邪魔になってると思うので、こういった基本計画の中から、図書館作りだってみんな並んでやってるよというんじゃないですけど、これが上手く行かなかったら次をやればいいんだよというのがあると、ほっとする。

役場のこういった計画書はきちっとしてて、自分のものとして受け止めきれないともあったりするのです。

可能なら、試行錯誤に関する文があってもいいと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

確かに「あれをしなきゃいけない」「これをしなきゃいけない」「こうしなさい」「ああしなさい」というものが強く見られるかもしれませんね。

(酒井委員)

だからそれを計画に書けっていうのはちょっと無茶かなって思いますけど、みんなで見直す会ですから。

(ARG 岡本)

それこそ美術館の制作の機能とか。作品、作り上げられなくてもいいわけじゃないですか。

宮崎アニメの『耳を澄ませば』で女子学生が小説を書いてある意味挫折する話とも言えるわけですが、あの話の尊いところは挑戦をして失敗をすることが人間を飛躍的に伸ばしていくとこなのかなと思います。

さっきの高校の留学受入の話とも絡みますが、四万十町は「失敗を前提に受け入れますよ」と。失敗しないで偉くなった奴なんていないわけで、むしろ一番の失敗は挑戦しないことだよ、というのを文化的施設の全体として「何でも『やりたい』って言ってごらん？」って。やり通すことが全てではないと教えてあげること。一番悔しいのはやり通せない本人であって、ただやり通さなきゃいけないっていうのは酒井さんがおっしゃった同調圧力なんですけど、高すぎると挑戦しなくなります。それは本当にもったいないことです。だから何かしらの形で全体的なコンセプトとして、間違えたって失敗したっていいし、

それで死ぬわけじゃないってことを伝えてあげたほうがいい気はしますね。大人からすると「そんな些細なことで自殺するのか!?!」ってことが多いだけに。失敗を恐れないのはやっぱり生き抜く力に充分繋がると思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

そういう意味ではサポーターとか促す人材というか、人たちの見方ですね。原点に立ち返りながら考えていただかないとならないということにも繋がりますね。

(谷口委員)

ちょっと聞きたいんですが、「2. イ 資料の位置づけ」という項で、「図書資料、美術資料、歴史資料」とあります。三つ目の歴史資料の中で、「一定の範囲での展示の実現と関係施設とのつながりの明示と誘導」と記載されてます。図書と美術の資料は他のページでも色々記載されてますが、歴史資料については、見る限りこのページだけのような気がします。

この問題について話し合っ、施設の中には置いてあってもどういうふうにするか、将来どう扱っていくかの議論もしたはずですので、ぜひその今後の方針として、歴史資料、永続資料をどう扱って、ゆくゆくはこの方向で持っていきたいというビジョンを項目に入れてもらえれば非常に有難いんですがどうでしょうか？

(内田委員長)

ありがとうございます。

目標や管理運営よりも、四万十町にある歴史的資料の今後の取り扱いや方針ですね。そこを、もう少し前でも触れられないかと。

それについてはこの会の中で話して、一旦置いておこうかという話になってはいましたが、方針や方向性については一定配慮してますので。

(ARG 岡本)

すいません。冒頭の「1. 文化的施設の役割」の「ア 意義と理念」の中に、ここまで議論をしたけど今後の申し送りのために、後半に一文、歴史的資料についても議論はしたが、今回の文化的施設の直接的対象にはならないがそれを大事にしていくということは確認しました。

文化的施設の中でも一部は見せられるようにして、町内に点在する諸施設に対する誘導をかける形で、第3章に繋げるのはいかがでしょうか？

(谷口委員)

そういうふうに文言を入れてもらえれば。

結局、文化施設をどうするかを検討委員会なので、いわゆる図書・美術に特化しての議論ではないと思うんです。そろそろ原点に戻って、文化的施設を入れてどう検討するかがこの問題の一番の起こりでした。

各地域に歴史的な重要書類、生活風景、あるいはそれを利用したことによる耕作、農耕など、そういう資料がたくさん残っております。これもまた歴史を勉強する上では、学生がそれを学習することによって、いかにこの町の中で色々な物を使って生産性を育んだ、あるいは豊かな農耕を育んだということも学びだと思っんです。

だからこれを将来的には集約して、整理して。今、雨漏りがしたり放置されたりしてる現状を憂うわけで、こういうことも将来的にきちんと整備しますってことを記載してもらえれば、全体を包括したものになるんじゃないかということです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

今おっしゃったことを初めに、まだ議論は尽くせていないけれど、こういう方向性が非常に望まれるんだってことを入れておくことになるかと思っます。

当然それらを含めて、人を育てていく仕組みをどういうふうに作っていくかがこの文化的施設の機能ですので、そのことと無関係ではありえないので、そこに触れるような形を考えたいと思っます。

他にはいかがでしょうか？

第3章の目標と管理運営に行くとき細かく考えがちですが、もう少し文化的施設の理念や方向に合った形であえて目標をこんなふうに表示していくわけですし。管理運営についても職員が何人とかそういうことではなく、何を大事にしていくかの書き方になっていますが。

(刈谷委員)

資料をありがとうございます。

質問ですが、p9の「(ア)核となるサービス目標」の中の「直接的には参画しない町民の誇らしさの重視」はどういうことか教えてください。

必ずしも文化活動に参画してない、表面的にはしてないように見えても、それを否定しないということですか？ ちょっと読み込めなくて。

(ARG岡本)

書いた側として考えたのは、使ってる人はいいんですよ。

図書館などで来館者向けアンケートをやると、満足度90%以上出るのは普通なんです。人が来てるのに90%を切ったらむしろ事件です。何で来館してくれてるか意味の分からないことになる。現在の図書館もそうだと思いますが。

住民の利用率は20%くらいです。20と言うと低く思われやすいです。ただ、住民の半数が使う公共サービスって存在しないので、20%は高いほうなんですけど、その数字だけ聞くと流されやすいんです。半分も使ってないじゃないか、って言われやすい。

ちなみに図書館の利用率は高くして3~4割です。これを上回れるのはスポーツ・運動施設だけです。利用延べ人数だけをカウントするとスポーツ・運動施設が勝ちます。なぜならば、朝練があり毎日使う子どもたちがいるのと、運動会という一大動員イベントがあるからです。実利用者のカウントだと図書館より下ではないかと思っれます。ただやはり、住民の過半数が使わないんですね。図書館も美術館も。だか

らこの方々の満足感を上手く指標化する必要があります。

そこで思うのが、佐賀県伊万里市の図書館。やっぱり「いい」とされる図書館がある地域は、「(自分は) 図書館使わないけど、うちには良い図書館あるんだよ」と自慢する人たちはいるんです。そういう人たちが生み出せるかが鍵だと思ってます。「私は図書館に一切行かないけど、でもね、うちの町の図書館／美術館はすごくいいから行かなきゃだめだよ」と言ってくれる人たちを生み出す。つまりそれは誇らしいと思ってるということです。自分が使わなくてもああいう施設があることは誇らしいし、自分の税金がそれに役立ててられてるのはむしろ納税している甲斐があると思える。そこを早い内から目標として定めたほうがいいと思います。

現時点では、町長も教育長もこの事業に大変ご理解があります。ただ、20年先、30年先、役所の執行部が今のままということはないので、全く違う考え方を持った方が上に着任された時、または議会で多数を占めた時、「こんな事業、意味あるの？」という声が出る日が必ず来ます。その時に「そんなことはないです。この施設は使わない人たちの満足度を評価指標にしてきました。私は使わないけどこの施設を持ち続けることを断固支持しますと言う町民の割合は、実は過半数を超えています」と言うために、最初から評価指標にしたほうがいいと考えて、このような記述にしました。

(酒井委員)

使わない方の満足度で誇らしさが生まれる背景は？ ニューヨーク図書館みたいに、それがあから教育の底上げがあったり、失業者が減ったり、社会的リスクも低くなったり、お年寄りの健康度が高まったり？ そういうのが数値化されてたほうがいいというか、連動して見たほうがいいということですか？

(ARG 岡本)

はい。そういう各種政策に対するプラス効果を測定したほうがいいと思います。

例えば分かりやすいのが、大学進学率。高等教育を受ける時はやはり生涯賃金に関わるのが今の社会です。そういったところで勉強の成果が出ているか。これは非常に分かりやすいのと、何より保護者へのアピールとして強いので、確実に保護者は支持するからです。

それ以外にも、酒井さんがおっしゃった社会政策の費用が減るというのは重要です。最近ですと積極的に図書館が認知症対策に乗り出すというのが重要政策になってます。そこで認知症発症を予防する。

より問題になるのは独居老人です。長命化に従ってどうしても独居になる方が増える。独居の方の居場所作りが、結果的に孤独死を防ぐ。

これらの多様な数値をここで出したほうがよいです。ただ、論理的にはズバリ聞いたほうがよくて、端的に言えば「あなたがこの町に住み続ける理由になっているものを選んでください」と尋ねた時に文化的施設が挙がると非常にいいですね。まさに居住して納税する理由そのものであるからです。

伊万里市はそこにすごく拘っていて、これがあるから私はここにいる、という強固な支持ですね。あそこまで面と向かって言われると、政治の力で図書館をどうこうするのは簡単にできなくなります。結果、伊万里市の市民の方々は「私の書斎、私たちの公園だから、勝手にさせないぞ！」という強い意志を持っていますし、そこを守っていると言えます。

伊万里市でライブラリーサポーターをされてる方の中には全然図書館を使ってない人もいます。単に

そこが好きだからという理由で、図書館の熱心な利用者ばかりではないと聞きます。

そういう方にも緩やかに。例えば、私は花が好きだから新施設周辺の花壇を整えるだけでも手伝いをしたい、とかそういう人たちの関わりしるを段々増やして、最終的には町民評価として、文化的施設が何よりも高いところに挙がる存在になればと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

いかがでしょうか？ この考えを元にしながらいかなる点を取り上げて評価するかです。

岡本さんが出しているのはこういう深いところで評価していこうよという、あくまで考えです。今日決まるというわけではないです。

(ARG 岡本)

一般的に言えば、図書館の評価は来館者数と貸出件数になりやすいです。でも、来館者数を競うとか愚かしいので、いい加減やめたほうがいいと思うんですよ。

そもそも貸出件数を競うのが一大ブームでしたが、さすがにそれは愚かしいということになった。でも最近は町のにぎわいを生むという名目の下、また来館者数を競ってます。100万人だ200万人だという数字が出まくってますけど、業者の立場ではっきり言ってしまうと数字なんて出そうと思えばいくらでも操作できます。カウンターの付け方でいくらでも増えます。

同時に気づかなきゃいけないのは、(図書館に)人が来すぎるとさらに税がかさむんですよ。開館時間を長くしたり、職員体制を手厚くしたりしなければいけない。それが政策的に正しいなら構わないです。ただし、使われるのは四万十町民の税金です。だから町外者ばかりが来るようになった時に、果たしてそれは何のためかを考えておかないと、町民がいつ行っても使えなくなる。これは町民の満足度、一気に低下します。

結果として来館した人が移住してくれるならいいですよ？ 町民が増えて税金を払ってくれる人が増えるならいいですし、図書館と美術館を使うために一泊してでも四万十町にお金を落としていくのもいいですけど。

ここが図書館の難しいところで、美術館は課金できますが図書館は課金できない。となると、実は人が来れば来るほど赤字が増える。ならば今の段階から来館者数の目標をあまり掲げないほうがいいのではないかな。

一応、行政上はそういう数字があったほうがいいです。ただし、その姿勢に一喜一憂しないで、もっと質的な効果ですね。町民の過半数が支持すれば政策は維持されます。7~8割であれば絶対揺るがない町の指針になります。

大事なものは、町民の皆さんが納得して満足して、納税することに意義を感じてくださるかです。その辺を記述したのがここの趣旨です。

実際に提出する時には、来館者やイベントなど数字は出さなければいけません。その辺の数値は施設規模と人口から単純計算で出せます。それよりは委員会の意思として、量的評価に拘っていいのかな？ と思っていただければと思います。

量的評価するのは大変苦労していて、全国的に見ると図書館の来館者数は明らかに減ってきています。

全体を分析すると、新館になった所だけが倍増・激増していて、古いままのところは右肩下がりに落ちてます。

高知県内で見るとおそらく県内全体の図書館利用者は倍増していると思われます。ほぼオーテピア効果ですね。それ以外の市町村はむしろ落ちているはずです。下手な数値目標を持つと、常に前年度を上回らなければいけないという理屈が行政の中ではどうしても出てしまって、厳しいことになります。人口減もカウントしながら、むしろ右肩下がり目標を持たねばならないのが現状の気がします。

(酒井委員)

それで行くと町は、四万十町総合振興計画とまちづくり計画と市街地活性化構想と連携して図書館を位置づけるとあります。

町外の方ばかり来ても、岡本さんのおっしゃったデメリットがあつたり、かといって来てもらわなければ連携があれだったり、バランスをどう捉えているかによって目標も変わると思います。

(内田委員長)

もちろんそういうこともありますが、この委員会として今のような所と連携・協働するのはある種の戦略ですのでね。そういう意味で、町民の過半数を獲得するくらいの戦略が必要ということですよ。だから向こうが設定した数字に合わせるとか、経営もそれに左右される懸念もあります。とはいえ、そういう中で戦略的にやっていくのは大事な課題なんです。無視はできないし、入れておこうという。

(酒井委員)

サービス目標の中に町外の方の利用について全然書いてないじゃないですか。町外の方は入れないで、あくまで町内のサービス目標として置いておく？

(内田委員長)

現段階で公開しているので、今後触れないわけではないです。

(ARG 岡本)

入れたほうがいいかとは思うんですよね。多少野心も持っていいかと思って。

ただ、気をつけたいのは、人口問題は解消不可能であり、近隣自治体から奪ったところで意味がないということであれば、抑えたほうがいいと思います。

四万十町の西であれば四万十市や土佐清水市ですね。そちらから来てくれる人が増えたら嬉しいかもしれませんが、そんなことしてて宿毛市(の図書館)が無くなったら困るので。そこは奪い合いにならない関係が必要だと思います。

町外からの利用は、四万十町の文化や自然が人を集めるだけの魅力を持ってて、交流人口ともいいますが、それを増やす。

関係人口というものも最近注目されています。私なんか立派に四万十町の関係人口ですね。ほぼ毎月来るので。最近是谁彼なく「おかえり」と言われるのがすごいと思います。要するに何かの関係性を持ってそこに来る人たちを増やす。

これが四万十町の中で、窪川だったら「喫茶淳」なんかそういうお客さん付いてますよね。店内の壁に貼られたお便りを見ると、「ツーリング途中で合流するの楽しみです」という方もいらして、すごいネットワークがある。そういうところに注目して外から人に来てもらうようにするのは良いと思います。それに多少触れておく。

閉鎖的になる必要はないんです。十和の分館を建てる場合はむしろ近隣の西土佐、愛媛県から鬼北町など。あの辺は図書館ないので。図書館を作る計画はありましたが頓挫して。それこそ十和にそれなりのものが出来れば、西土佐の図書館を含めて、県域を越えて使ってくれる人を獲得していきましょう。それで十和にお金を落として帰っていただけるとかは考えたほうがいいと思います。

あくまで人口を外から集めようって考えにせずに、交流して関係性を持ちながら助け合って生きるために、これくらいの人に来てほしいよね、という書き方が妥当ですかね。

(林(一)委員)

ちょっと構いませんか。

この事業は非常に大きなものですので、勉強がなっておらんとは思いますが。

いま検討しているものが基本方針ですので、将来的に非常に重要な形で町民にも示されると思っております。

その中で、第1章ではやっておりますが、文化的施設の主体的な内容が、図書館と美術館の機能を中心にするのはいいと思いますが、その他に、この構想が始まった時、町長からも話されましたが、非常に大きな町ですので、郷土資料館も必要です。または郷土資料の展示館ですね。

この委員会が発足した時に見て回った施設が窪川・大正・十和にあります。これは大変だと、見て回った皆さんも感じたと思います。

それから明治維新期に活躍した草莽の志士ですが、この四万十町にもかなりいます。その方の展示を四万十町で行いました。かなりお金をかけて色んな資料を展示できるものがありました。今は倉庫で眠っておりますが、長いこと置くと、カビも生えて大変だと思います。

一部は四万十町役場のロビーで常設して開放されておりますが、これの安定的な所、かなり大きな施設と思いますが、規模や町の予算がどれくらいになるかまだ分かりません。

他にも、町内にある古代からの発掘資料もあります。それらがまとまってないので、段々とよその地区に流れて行って、町から姿を消しています。有形文化財で、銅矛や石碑等がなくなっております。

合わせて、図書館に関係があるものでも長じて構わないですが、昔からある各藩からの通達文書、そして明治以降の県庁からの行政文書についても、公文書館を作って保存・活用せねばならんと法制化されました。この基本計画にも入れるべきではないかと思いました。

あまりたくさんではないと思いますが、今の集落が昔の村だった頃にあった地方文書、古文書なんかも今、教育委員会でも整理されてます。

ここの計画の中に、もっと具体的に郷土資料館も示すべきだと考えております。どうでしょう？

(内田委員長)

ありがとうございます。

先ほどされた谷口さんの質問と関連あることだと思います。その時にも答えた通り、議論を尽くせて

ない部分があります。特に郷土資料や文化財資料も、元からあったけど尽くされていません。

この委員会の中で、まずは本来の図書館・美術館を中心にしながら進めてきました。今日議論が尽くされていないところがあるのと、それについてどこかできちんと触れる形になるかと思います。

もちろん図書館・美術館の文化的施設を作るにおいて、林さんがおっしゃった地域の歴史や維新の志士、文化財資料、これは当然必要で大事な物です。文化的施設をより活用していく上で。だから、それらを決して無下に扱うわけではないということは、この図にもあるように、四万十町の歴史と文化が核になるので、資料館を建てて保存の方針を書くことと、ここにあることを文化的施設に活かすことは、後者はかなり確定かと思いますが、前者はなかなか尽くせていませんので、方針の最初にはなりますが、触れる形にはなると思うんですね。

(林(一)委員)

方針的には分かりますが、今、一か所でも二か所でも、活字にして表現すべきではないかと。

教育委員会が文化的施設とは別個に公文書館を建てるなら構いませんが、なかなか大変ですので、今の計画の中に公文書館が出来るという形を出しておくべきだと。

政府も最近はそういった方針を具体的にせよと指示があったと思いますので、意見させていただきました。

(ARG 岡本)

その書き方はこうすればどうでしょうか？

ここで今「文化的施設」と謳っているの、必ずしも「図書館・美術館だけ」とは言ってません。「文化的施設」というネーミングは秀逸だったと思います。

検討しました歴史資料、郷土資料、文書資料、大変貴重なものがあることも分かりました。ただし現状では取り扱いに課題が色々あります。解決の一つの方策は、それぞれそういった施設を整備することだろうと。ただし今回に関しては、財源や目的から、文化的施設では直接の取り扱いの対象とはしないが、引き続きどのようにこの歴史的財産を受け継いでいくか、町としてきちんと検討してほしい。町に投げるというよりは、町と町民で一緒に課題として考えていきたい、とすると。

あと、資料として部分展示は可能だと思います。これは議論を喚起するためにも必要なことです。例えば歴史本のコーナーに坂本龍馬の本があればいいだけじゃない。調査・発掘されてきた文書資料がショーケースに入ってあちこちに展示されている。

それは図書館にとってもすごく良いことです。ただ有名人ばかりじゃないところに価値観を持てる人を育成する意味でもよいことですから、なるべく図書館・美術館の中でも歴史資料、郷土資料、文書資料を可能な範囲で見せると。

これは実際に瀬戸内市民図書館がやってることで、そこは郷土資料館を潰して図書館を建てましたが、実態としては郷土資料館機能を持っています。郷土資料館自体より郷土資料に関する問い合わせは多いそうです。リアルに見えるのは効果があります。

町民の皆さんへの説明の観点からも、入れたほうがいいと思ひまして。

今、私たちは佐川町の図書館整備の仕事もさせていただいています。佐川町は図書館と青山文庫を一体化させるんですよ。だから佐川町の動きが具体化してきた時に、四万十町の皆さんが「あれ？ うちって

何でこうなんだっけ？」って疑問に思われるんじゃないかと。

それぞれの町のやり方がありますし、佐川町はすでに青山文庫という立派な施設を持ってるのもありますが、うちはこういうふうを考えてますよと、四万十町の現時点の町と町民の皆さんの認識を残しておく書き方にするのがよろしいかと思いますが、いかがでしょう？

(林(一)委員)

分かりました。お願いします。

(内田委員長)

ありがとうございます。他にいかがでしょうか？

(青木委員)

すいません、とても小さなことですが、p8の第3章の2で文化施設間の連携の「四万十町『立』の幼稚園保育園」とありますが、四万十町には町立ではない児童福祉協会の施設もありますので、この「立」を「内」に変えていただきたいです。

(ARG 岡本)

小さくないです、めちゃくちゃ重要です。町立私立に限らず町のお子さんをお預かりいただいている全ての施設を対象にする、と。

(内田委員長)

ありがとうございます。

時間も押して参りました。第1章に関してはこの方向で決めようと思いますがよろしいですか？

2章と3章は引き続きこの会で協議を続けましょう。

では、11月の米こめフェスタで、文化的施設についてPRブースを設けて町民の気運を高めようと考えていますが、これについて簡単に事務局からご報告をお願いします。

(事務局)

11月3日に毎年恒例の米こめフェスタがあります。そこで、検討委員会から住民主体的な団体として、下元委員に代表になっていただいて出展の申し込みをしております。下元さんに確認したところ、ブースを二つ確保してあるそうです。

今後は岡本さんにもアイデアを出していただきながら、どういうイベント・展示にするか、今から協議をしていただきたいです。

(内田委員長)

お手元に配った資料はにぎわい創出課が出した出展要項です。

もっと具体的にどんなイメージがあるか、他の自治体の事例なども教えていただいて。

(ARG 岡本)

米こめフェスタは私、行ったことがないんで、皆さんのほうが雰囲気分かると思います。

ここで何か物販するというよりは出し物的な感じかと思うんですけど、そのアイデアを皆さんから募りたく考えています。

【米こめフェスタの出展内容について委員会で意見交換】

【ARG 岡本氏より過去に携わった自治体の事例紹介】

(内田委員長)

ありがとうございました。

定刻を少し過ぎてしまいましたので、米こめフェスタのことはまたお考えいただきたく思います。

次回は9月24日(火)の14:00からを予定しています。2章3章、特に2章を。今回はお示ししてませんが、それぞれの世代に応じた使い方なり思いなりをもう少し文章化しようと考えています。

では、第4回文化的施設の検討委員会をこれで閉じさせていただきます。

ありがとうございました。